The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インゲニウム考 : ローマ共和政後期における「競争的な政治文化」との整合性を中心に
Author(s)	鷲田, 睦朗
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2014, 48, p. 51-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

インゲニウム考

――ローマ共和政後期における「競争的な政治文化」との整合性を中心に――

鷲田　睦朗

キーワード：インゲニウム／ローマ共和政後期／「競争的な政治文化」

はじめに

共和政中期以降、ローマの政治はノビレスあるいはノビリタスと呼ばれる有力者層が取り仕切っていたとされている。このノビレスの支配力の淵源と目されてきたのが、クリエンテラと呼ばれる互酬的な上下関係、すなわちローマ社会特有のパトロニジである。この点に着目したノビレス支配論は、1912年に刊行されたゲルツァーの著名な論文に端を発し、[1] 20世紀における共和政期ローマ政治史研究の一大潮流を形成することとなり、様々な研究が展開された。[2] その一端に、当時のノビレス支配を支えていた政治的価値観を、古典史料における語用例から探ろうとする思想史的研究があった。その極北とされるのがエルグアルクの大著『共和政における政治的人間関係と政治党派についてのラテン語の語彙』である。[3] 同書では、序章で当時のローマ政治の特徴が概観された後に、政治グループに関する概念、政治家間の関係、政治家個人、共和政期の政治党派について、各々に関連するラテン語単語の用例が考察されている。当時の研究状況に鑑みれば当然であるが、彼が重視した語彙にはクリエンテラや党派理論[4] に関係する用語が多く含まれる。[5] これはノビレス支配というパラダイムを思想史的側面から補強した研究と位置付けられよう。

このノビレス支配論に対し、1980年代以降、多くの批判が提起された。[6]

その1つ、ホプキンスとバートンによる共著論文では、ノビレス間での政治競争の激しさが「勝れて競争的な政治文化 an extremely competitive political culture」[7] と表現されている。彼らの統計的分析によると、以前にコンスル職への就任者を輩出したことのある家系（コンスル級家系）の出身者がコンスル職に就任できる割合、すなわちノビレスの再生産率は、従来考えられてきたよりも低かったとされる。

これを批判するブルクハルトは、ホプキンスらが分析した前249年から前50年までの7世代にわたるノビレス家系の再生産率を共時的に見た場合に出てくる62％という数字を挙げて、むしろ高い数字であると評価している。[8] また、ベイディアンの研究を参照すると、[9] 共和政後期の前79年から前49年までにコンスル選挙に当選した56人の内、少なくとも38人、蓋然性の高い者を含めると最大で47人がコンスル級家系出身者であり、67.8-83.9％という更に高い数字が算出される。研究者各人で、コンスル級家系の定義・設定に多少の差異があるのは否定できないにしても、「ノビレスによるコンスル職の独占[10]」という状況が有ったこと、それが共和政後期に強化されたことには疑う余地はない。[11]

しかしながら当該時期においては、買収などによる不正が横行したり、選挙違反取締法が頻繁に提出されたりしており、コンスル選挙が激しく争われていた。[12] 無産市民的な都市大衆までもが実質的に参加していた蓋然性が高いことからも、当時の選挙の激しさが窺われる。[13] この一見矛盾するかのように見える事態をどのように理解するべきか。

当時の「ノビレス支配」の実態は、総体としてのノビレスが安定的な支配層を形成していたとしても、ノビレス家系の出身者であればノビレスの地位を安穏に保ち続けられるというものではなかった。多くの「敗北した候補者」[14] が脱落する厳しい政治競争がノビレスを中心に争われていたのである。そのような観点で見るならば、ホプキンスらによる「競争的な政治文化」という指摘は的を射たものであると評価できる。「ノビレス支配」の実態が刷新された以上、エルゲアルクが描き出したのとは異なる政治的価値観

を検討することが、本論が扱うべき問題となる。

具体的にはエルグアルクが殆ど看過しているインゲニウム ingenium という用語に着目して、まず従来から重視されてきたウィルトゥス virtus 概念との関連性の深さを指摘することからインゲニウム概念の重要性を示す。その上で、同概念の考察を通じて、それが当時のローマの政治状況と合致したものであったことを確認することとしたい。

インゲニウム概念の重要性

まず、インゲニウムという概念がどのようなものであるかという点を確認しておく。19 世紀以来刊行が継続されている辞典 *Thesaurus Linguae Latinae* の ingenium の項目には、生来の能力の総体（summa facultatum insitarum）、本質（φύσις）、自然に備わった性質（naturalis qualitas）、天性（indoles）とある。[15] 原義的な用法では人間の精神的能力という意味合いで用いられるが、換喩的に精神的能力を備えた人間を示す場合もある。

エルグアルクは、この用語を 600 頁以上にわたる前述の著作において、僅か 2 箇所でしか取り上げていない。1 箇所目は、政治家個人に関する語用例を対象とする第 3 部第 3 章である。[16] この章で扱われているのは、政治的影響力の表現としての「権威 auctoritas」である。この章でインゲニウムは、人に権威をもたらす時機 tempus の範疇に含まれる多くの事柄の 1 つとして、キケロによる列挙箇所で挙げられているにすぎない。[17] もう 1 箇所の共和政期の政治党派を扱う第 4 部第 4 章「平民に由来する政治グループ」では、「民衆の」popularis という形容詞が修飾する被修飾語の一例として、注で ingenium populare と書かれているだけである。[18] このような軽い扱いを踏まえると、エルグアルクがインゲニウムを重要な政治的用語とはみなしていないのは明白である。

とは言え注意しなくてはならないのは、エルグアルクが評価しなかったからといって、これまでインゲニウムという概念が全く注目されてこなかった

わけではないという点である。同概念は、歴史研究というよりも、文学研究の文脈において、「文才」の意味で扱われる場合が多かったため、[19] 政治的概念として分析されることは稀であったように思われる。その例外の1つとして挙げられるのが、吉村忠典氏の60年以上の前の研究である。[20] 吉村氏はインゲニウムを「天与の叡智」と訳し、前1世紀後半の歴史家サッルスティウスの『カティリーナの陰謀』『ユグルタ戦記』の歴史観を分析する際の中心概念として扱っている。[21]

ここで政治的概念としてのインゲニウムの用例を具体的に示すために、サッルスティウスの処女作『カティリーナの陰謀』を執筆する理由が述べられる冒頭部から引用する。

> 地を這い胃袋に従うようにと自然が創造した家畜の如くに、人生を沈黙に甘んじて過ごさぬために、他の動物に自ら勝りたい者は皆、全力で努めるべきである。さて、我々のあらゆる力は、精神 animus と身体 corpus に依拠している。我々は、支配 imperium のためには精神を、隷従 servitium には身体を、より多く用いる。我々は、一方で精神を神々 dii と、他方で身体を野獣 belua と共有している。したがって、体力 vires の手段よりも天性 ingenium の手段によって栄光を求めることが、また、我々自身が享受する人生 vita 自体は短いのだから、我々についての記憶 memoria をできるだけ長続きさせることが、より適当であるように私には思われる。なぜならば、富 divitiae や容姿 forma の栄光は儚く壊れやすいものであるが、精神力 virtus は優れており永続的とみなされているからである。
>
> しかし、人々の間では、長い間、軍事は身体の能力 vis corporis と精神の偉力 virtus animi とのどちらによって、より一層成功するのか、という大きな論争があった。なぜなら、事を起こす前には熟考 consultum が、熟考した後には迅速な実行 factum が必要となるからである。このように、（精神と身体の）いずれも、そのものだけでは不完全で、もう

一方の助けを必要とする。[22)]

この箇所で特徴的なのは、精神に属するもの（animus、imperium、dii、ingenium、memoria、virtus、virtus animi、consultum）と身体に属するもの（corpus、servitium、belua、vires、vita、divitiae、forma、vis corporis、factum）との二分法による対比である。軍事の場合は身体に属する factum も重要とされるものの、インゲニウムを含めた精神に属するものに重きが置かれているのが分かる。その軍事においてさえ、続く箇所で「ついに危険や難事を通じて、戦争においては天性 ingenium が最も有効なことが学ばれた[23)]」とされており、精神的属性であるインゲニウムの優位性が強調されている。このような思想は、サッルスティウスの第2の史書『ユグルタ戦記』にも踏襲されている。

> というのも、人類が、身体 corpus と精神 anima から構成されているのと同様に、我々の全ての行状と全ての志向は、あるものは身体の性質に、あるものは精神 animus の性質 natura に従うからである。したがって、輝かしい容貌 facies、多大な財産 divitiae、また、身体の力 vis やこの種の他のもの全ては短期間で消え失せるが、天性 ingenium の卓越的な諸行為は、死ぬことのない精神のようである。
>
> つまり、身体と運 fortuna の良好さには始まりと同様に終わりがあるので、立ち現れたものは、全て倒れゆき、成長したものは全て年老いる。それに対し、不滅で永遠の精神は、人類の指導者を演じ、あらゆることを支配し、それ自身は支配されないのである。最高の名声をもたらす精神の諸術が、このように多く多様であるこの時に、放蕩と怠惰を通じて身体の喜びに囚われて時を過ごし、しかも、天性を――人の子の性質の中で、これ以上に良いものも偉大なものもないのだが――無為と怠慢によって鈍くなるままにする者たちの歪みは、それだけ一層驚くべきものである。[24)]

吉村氏は、このような精神的インゲニウム至上主義をサッルスティウスの思想の中心と捉えている。しかしながら、この考え方はサッルスティウスに限られたものでは無い。例えば、伝統的価値観が散見されるプラウトゥスの喜劇『三文銭』（前 186- 前 184 年）には、「賢明さ sapientia は、年齢 aetas ではなく、性格 ingenium によって得られるものだ。年齢は賢明さに味を添えるだけで、賢明さこそ年齢の糧なのだ[25)]」との記述が既にあり、サッルスティウスより年長の同時代人であるキケロも「さあ、われわれの眼前に最高の才能 optumi artes をもった人がいると仮定し、その人を少しばかり心の中に想像力で思い描くことにしよう。まず、その人物は卓越した才能 ingenium をもっていなければならない。なぜなら、愚鈍な知性 mentes には、徳 virtus は容易には伴わないからである[26)]」と書き記している。確かに、身体と精神とを二分法的に対比しているサッルスティウスに比べると明示的ではないかもしれないが、少なくともインゲニウムを高く評価する価値観は、サッルスティウスによって創始された見解ではなく、彼独自の特殊な見方でもなかったと言えよう。

さらに着目したいのは、インゲニウムとウィルトゥスとの親近性である。ウィルトゥスはローマ政治思想研究における中心概念である。[27)] このことから、同概念との関連性の高さを示すことで、インゲニウムの政治的概念としての重要性を示すことができよう。[28)] この点については既に挙げた史料においても 2 例確認できるが、[29)] 更にキケロによる用例を 3 点挙げて、本章の結びとする。

> 君たちは新人の精勤 industria を憎み、彼らのつましさを蔑み、彼らの才能 ingenium や徳性 virtus を抑圧し、抹殺してしまいたいと願っているのである。君たちが愛するのは、ウェッレースなのである！[30)]

そして、君に期待されているのは、まさに比類のない人徳 virtus と非凡

な才能ingeniumを備えた者に期待すべきものだ。[31)]

徳virtusを導きに、幸運を仲間に、君はあらゆる最上の達成を遂げた。しかも、いまだ青年の頃に獲得したのだ。多くの者が妬んだが、君は才能ingeniumと努力industriaによって、彼らを粉砕した。[32)]

第1、第2の史料ではインゲニウムとウィルトゥスが同列で扱われ、第3の史料ではインゲニウムとインドゥストゥリア（努力・精勤）とが同列で扱われている。ここにインゲニウムとウィルトゥス、そして次の章以降で言及することになるインドゥストゥリアの関連性が看取されよう。

訓育されるインゲニウム

本論では、インゲニウム概念について、3つの観点から考察を試みる。本章で扱う第1の観点は、インゲニウムが後天的に訓育される能力だとみなされていた点である。この点を確認するため、再び『カティリーナの陰謀』に立ち戻ることとする。

したがって、（歴史の）始めには、王たちは、――なぜ（私がここで、このことについて述べるかと言う）なら、王が地上で最初の支配者imperiumの名称であったからだが――各人各様に、ある者は天性ingeniumを、他の者たちは身体corpusを鍛えていたexercebant<exercere。[33)]

（彼ら＝ローマ人は、）権力の名称として、王権を正当な権力とみなしていた。老齢のために体こそ弱っているものの、天性ingeniumは智慧sapientiaによって強められていた選良が、国家のために協議していた。彼らは、年齢故か、役割が似ているからか、父達と呼ばれていた。[34)]

ここで着目すべき点は、インゲニウムという先天的な能力が後天的に訓育されうるという考え方である。これは現代的な価値観を持つ我々からすれば、一見、自明のことのように思われるかもしれない。しかしながら、先天的なインゲニウムが、分別 sapientia に導かれて[35]（あるいは努力・精勤 industria などを通じて[36]）、後天的に訓育 exercere[37] されうるという価値観は、旧来のノビレス支配論から導き出されていた閉鎖的な身分としてのノビレス像とは矛盾するものである。すなわち、「後天的に訓育される先天的才能であるインゲニウム」とは、前述したホプキンスらによる批判以降、通説視されている「競争的な政治文化」に整合的であり、ローマ政界において社会的上昇の機会が存在していたことを示唆する記述であると言えるだろう。

前章で示したインゲニウムの重要性・ウィルトゥスとの結びつきと同様、このようなインゲニウムに関しての捉え方もまた、サッルスティウスだけのものではない。キケロの次の一節が動詞こそ違えども、同様の価値観を示している。

> つまり、我々の素質 ingenium には生まれつきの徳 virtus の種子があり、もしそれが立派に生育すること adolescere さえできれば、自然が我々を幸福な人生へと導いてくれるはずである。[38]

ここで注意しておきたいのは、キケロとサッルスティウスの相違点と共通点である。そのためにサッルスティウスの政治家としての略歴を確認しておく。[39] サッルスティウスは前 55 年頃にクアエストル職に就任したことが公職就任階梯 cursus honorum より確実視され、同職への就任により元老院入りしたとされる。前 52 年に護民官となってカエサルに近い立場で活動し、一時元老院から除籍されるも、前 48 年にクアエストル職に再任され、元老院の議席を回復した。ポンペイウス派との内乱ではカエサル派として、前 47 年よりアフリカ方面で従軍し、前 46 年にはプラエトルとして一軍を率い、

戦後、新設されたアフリカ・ノウァ属州の総督となる。前44年のカエサル暗殺後、政界より引退している。このように政治党派の観点では、サッルスティウスがキケロとは異なる立場であった。信憑性の低い史料であるが、キケロとの間に交わされたとされる非難の応酬の内容の書簡も存在する。この書簡については、恐らく後1世紀に別人によって、修辞学の教材として造り上げられたものではないかとされている。しかしながら、少なくとも彼ら両者の異なる政治的立場が、書簡の作成時に意識されていたことに疑いの余地はない。おそらく、両者の政治的立場の相違は、後世のローマ人にも良く知られた事実であったろう。旧来的な学説では、キケロは閥族派、サッルスティウスは民衆派と区分されようが、政治的立場の異なる両者が共に「インゲニウムは訓育されうる」という価値観を共有しているという事実は、そのようなラベリングが必ずしも適切ではないことを示唆している一証左だと言えるかもしれない。

他方で、両者の共通点として挙げておかなければならないのは、彼らの出自である。彼らは両者ともに、イタリアの地方都市の出身（キケロはアルピヌム市、サッルスティウスはアミテルヌム市）であり、祖先にコンスル職就任者を持たない「新人」homo novusであった。キケロとサッルスティウスは、自らのインゲニウムを伸ばすことによって、政治家としてのキャリアを重ねたと自負していたのではないだろうか。もしこの見方が妥当なものであるとするならば、少なくとも「新人」の立場からは、インゲニウムが後天的に育成されうるという価値観が共有されていたと言えよう。このような「新人」とインゲニウムとの親近性という観点で看過できないのが次の一節である。

> そして若者たちよ、高貴な生まれの者たちよ、君たちの父祖の先例をまねるように勧めたい。それから、自己の才幹ingeniumと徳行virtusにより高い身分nobilitasを得る能力のある者たちよ、多くの「新人」たちhomines noviが名誉と栄光を獲得した道を歩むよう、諸君を励ますつもりだ。[40)]

これは前 56 年に、暴力罪の廉で訴えられた友人セスティウスを弁護した際、陪審席の若者たちにキケロが述べたものである。後半部は、ノビリタスを目指す将来の「新人」に向けられている。この記述は前半部で、直前の「高貴な生まれの nobiles」若者たちに、父祖を模倣すること maiorum imitatio を勧めるのと対を成している。ノビレスと異なり、依拠するべき模範を持たない「新人」にとっては、ウィルトゥスとインゲニウムが出世の頼みであるということであろう。このような言説が裁判の行われたフォルムという公開の場で発せられていることは、2 つの点で興味深い。まず、激しい競争を伴った政治の場において、インゲニウムがウィルトゥスと同様に「新人」にとって重要であると表明されている点である。さらに重要なのは、そのことを公開の場で表明しても政治的に問題がないと発言者キケロが判断していた点である。後者の観点からは、この価値観が少なくとも「新人」にとって当然のことであるということが、「新人」以外にも広く共有されていたということを意味しないだろうか。

インゲニウムが訓育されうるという思考法についても、これが「新人」特有のものであったのかが問題となるだろう。この点については、筆者は否定的な印象を持っている。後代の事例ではあるが、大プリニウス『博物誌』の一節に次のような記述が認められるからである。

> 以前は、諸国の支配権 imperia は自国の内に限られており、（国民の）天性 ingenia もそこまで（に限られたもの）であった。運命の何らかの不足により、精神 animus の長所 bona を訓練すること exercere が必要であった。[41)]

これは直接的にインゲニウムを訓育する記述ではないが、文脈より exercere の目的語である精神の長所 animi bona はインゲニウムの言い換えと考えて問題はないだろう。共和政後期の政治状況とは異なる後 1 世紀のプリニウスによって、ローマが帝国となる前の状況について、このように記述されてい

るのである。これを考慮すると、「インゲニウムは訓育されうる」という価値観は、共和政後期の「新人」だけが抱いていたものではないという推測が成り立つのではなかろうか。いずれにしても、新人ではないノビレスが抱いていた価値観を知る史料が確認されない以上、安易な断定は避けるべきであろう。

ここで本章を総括するために、サッルスティウス『ユグルタ戦記』において、理想的な「インゲニウム人[42)]」として描かれているマリウスの人物描写を確認する。

> すでに以前から、コンスル職への並々ならぬ欲望が彼（マリウス）を駆り立てていたが、家門の古さを除けば、それを得るため（に必要なも）の全てがふんだんにあった。精勤 industria、誠実、大いなる軍事知識、戦時には非凡で、平時には平静で、欲望と富に打ち勝ち、栄光だけに貪欲な精神を。さて、彼はアルピヌムで生まれ、少年期全体を過ごした。軍務に耐えられる年齢になるとすぐに、ギリシア風の弁舌や首都風の虚飾ではなく、為されるべき兵役に、己を駆り立てた exercuit<exercere。このように、美質 artes bonae の中で、やがて完き天性 ingenium が成長した adolevit<adlescere。[43)]

前 2 世紀末から前 1 世紀初めに活躍した「新人」マリウスが、華美を避け軍役の中で、インゲニウムを訓育したとの記述である。先天的に授かったインゲニウムを後天的に訓育させる「新人」像が、如実に表現されていることが窺われよう。次章では、このような人物描写におけるインゲニウムの用例を考察することとしたい。

インゲニウムによる人物描写

本章では、インゲニウムが人物描写において用いられている記述の考察を

行う。前章の最後に挙げたマリウスのように、古典史料においてインゲニウムが人物描写に用いられている事例が散見される。まず、マリウスと対照的に悪漢、あるいは「非インゲニウム人[44)]」として描写されるカティリーナについての記述を確認する。

> ルキウス＝カティリーナは名門 nobilis の出自で、精神面 animus でも身体面 corpus でも大きな力を持っていたが、性根 ingenium は邪悪で歪んでいた。この男は、若年期から、内戦、殺人、略奪、市民の不和を好んでいて、それらの中で自らの青年期を過ごした。身体は、他人には信じられない程、飢えや寒さや不眠に耐えた。精神は、大胆で狡猾で捕らえ所がなく、いかなることをも偽り隠すことができ、他人の物を欲しがり、自分の物を浪費し、様々な欲望に燃えていた。弁舌には長けていたが、分別 sapientia はあまりなかった。[45)]

この記述で指摘しておきたいのは、インゲニウムが邪悪で歪んでいたとされるカティリーナがノビレスであると記述されている点である。人物評価に際しては、「新人」だけではなくノビレスについても、インゲニウムがポイントとなっている点が興味深い。当然ながら、著者であるサッルスティウスが「新人」であるので、彼の価値観が投影されていると考えるべきであるから、この判断には一定の留保が必要であるだろう。しかしながら、インゲニウム概念が広い対象に使用されている事例として確認しておくべきであろう。ここで注意を要するのは、カティリーナがノビレスであるとされるのは史料に即したものであり、研究者によって定義されたコンスル級家系としてのノビレスではない点である。カティリーナの属するセルギウス氏族は、アエネアスの同伴者セルゲストゥスを名祖とする名門であるが、彼の家系にはコンスル職に就任した祖先は確認されない。[46)] ここでは、何をノビレスと定義するかという研究者の見解の分かれる問題に深く立ち入ることはせず、nobilis という言葉が持つ「有名な」との原義に即して、単にコンスル級も含

めた有名家系出身者としておく。

つづいて、インゲニウムの使用対象がローマの「新人」に限定されていないことを示すために、ローマ人以外の人物描写にもインゲニウムが利用されている事例として、前 2 世紀後半にローマと戦ったヌミディア王ユグルタの描写を確認しておく。

> （ユグルタは）成人した時、体力 vires は強力で、容貌 facies は美しく、さらにとりわけ天性 ingenium は強健であり、放蕩や怠惰で自らが堕落するのを許すことなく、彼の国の慣習通り、馬に乗り、槍を投げ、同年輩の者と徒競走で競った。[47)]

ローマと争う敵役であるにもかかわらず、ユグルタは前述の「インゲニウム人」マリウスが争うに相応しい、肉体的な美質のみならず、立派なインゲニウムをも備えた好敵手として描かれている。このようなインゲニウムを用いて描写される人物は男性に限らない。

> しかし、彼女の天性 ingenium は、拙劣ではなかった。ある時は控えめな言葉で、ある時は柔和な（言葉）で、ある時は傲慢な（言葉）で、詩句を作ることも、冗句を発することもできた。つまり、豊富な機知と著しい優雅さとが、（彼女に）宿っていたのである。[48)]

ここで描写されている女性は、前 77 年度コンスルのデキムス・ユニウス・ブルトゥスの妻、後にカエサル暗殺に加わるデキムス・ユニウス・ブルトゥス・アルビヌスの母センプロニアである。彼女は伝統的なローマの女性像からは大きく逸脱した人物である。ウィルトゥスは、原義が「男らしさ」であるため、軍事に携わらない女性の精神的能力を示すのには用いにくい言葉であるが、インゲニウムに関しては、そのような問題は生じない。また彼女のインゲニウムの内容の 1 つに、修辞能力があるが、これについては後で取り

上げることとしたい。

つづいて、このような人物描写に用いられるインゲニウムが、本論の冒頭で紹介した「競争的な政治文化」と結びついている事例を取り上げる。

> プブリウス＝ムレナは、凡庸な天性 mediocre ingenium の人物であったが、故事や文学の研究に熱心で studiosus、知らないことはなく、多くの精勤 industria と大いなる努力 labor の人であった。（中略）ルキウス＝トゥリウスは、天性 ingenium こそ乏し parvus かったものの、多くの努力 labor によって、どのようにでも（演説）できるようになり、頻繁に演説を行った。そして、彼は、コンスル職には、僅か数ケントゥリアだけ足りなかった。[49)]

これは、キケロが友人ブルトゥスとアッティクスの求めに応じて、舞台となっている前 46 年までのローマの主要な弁論家について論じたという設定の著作『ブルトゥス』の一節である。ムレナとトゥリウスの両者ともに、乏しいインゲニウムをインドゥストゥリアなどで補った人物として取り上げられている。特に着目したいのは、後者についての「コンスル職には、僅か数ケントゥリアだけ足りなかった」との記述である。[50)] トゥリウスが落選したのは前 65 年に実施された前 64 年度コンスル選挙においてであるが、ローマの公職就任階梯を考慮すれば、彼は前 67 年以前にプラエトル職に就任しているということになり、事実、ブロートンの想定では前 75 年度とされている。[51)] 公職に就任するために必要とされる年齢は、プラエトル職が 40 歳、コンスル職が 43 歳である。前 75 年度プラエトル職を務めたトゥリウスが、前 64 年度になって立候補しているということは、最短ならば 3 年で済むインターバルが、彼の場合は 11 年間であったと想定される。翌年の前 63 年度に「天性 ingenium や経験 usus、あるいは慎重さ diligentia によって得ることができるものの全てを手にしており[52)]」「諸公職の極み（＝コンスル職）を、我々の年（法定最低年齢）に全票で獲得した[53)]」キケロとは対照的な、乏

しいインゲニウムを「多くのインドゥストゥリア」などによって補うことで「競争的な政治文化」を生き抜いた政治家の姿が、ここに見出されると言えるのではないだろうか。

このことを示すのに格好の記述が、キケロの弟クィントゥス・トゥリウス・キケロが書いたとされる『選挙運動備忘録』に2箇所ある。これは前64年に行われることになる前63年度コンスル選挙に臨む兄に対して、備えておくべき心構えを再確認してもらうために書いたという設定の著作である。クィントゥスが本当の作者であるか否かという点については議論がある。しかしながら、この著作は当時の政治状況を良く反映していると評価されており、おそらく当時の価値観においてインゲニウムがどのように見られていたかを知るのに役に立つ記述であると判断しても問題はないと思われる。

> 以前の新人ガイウス・コエリウス[54]よりも、どれほど貴方に選挙の良い状況が与えられている事でしょうか。彼が2人の最も高名な人たちhomines nobilissimiと争ったのです。名門貴族nobilitasであること以上に、最高の天性ingenia、最高の慎みpudor、最大の恩恵beneficia、最高の分別ratioと慎重さdiligentiaを争うべき多くのものが、彼らにはあったのである。しかし、コエリウスは出自genusにおいてはるかに劣り、（他の点でも）ほとんど何も勝っていなかったのに、彼らの一方に勝ったのである。[55]

> たしかに、無能で怠惰で、恩義officiumもなく、天性ingeniumもなく、悪評infamiaのある、友人amiciもない人物が、多くの人々の支持とあらゆる良き評価によって守られた人物に勝るという事は、無関心という大過無くしては起こりえないのである。[56]

第1の箇所において、選挙で争われるべき美質の最初に挙げられているのがインゲニウムである。ノビレスでさえ、それらの美質を選挙で争っており、

その点で劣っていなかった場合も落選の危機があったことが示されている。インゲニウムは政界を生き抜くための必要条件ではあっても、十分条件ではなかったということであろう。第2の箇所では、インゲニウムを始めとする美質を備えていても落選する場合の条件として、選挙民の無関心が挙げられる。明らかに、旧来のノビレス支配とは異なったローマ政治像が浮かび上がってくるのである。

用いることで成長するインゲニウム

本章では、文才という意味で用いられたインゲニウムについて考察する。前章で触れたセンプロニアの修辞能力やトゥリウスの弁才のように、インゲニウムには叙述能力という意味もある。まず歴史叙述について、サッルスティウスが述べている箇所を取り上げたい。

> さて、天性 ingenium によって実行される exercentur<exercere 他の事業で、特に有益なのは、事績の記録である。その価値 virtus については、多くの人たちが述べているし、また、異常性ゆえに私の志向 studium を賞讃することで私自身を高めていると誰も考えないように、省略されるべきであると思う。[57)]

『ユグルタ戦記』の冒頭で、自らが歴史叙述を行う意義について述べている箇所である。前述した箇所では、インゲニウムが「訓育する exercere」対象であったが、ここでは歴史叙述がインゲニウムを駆使することで実行される行為として述べられている。ここから、用いることで成長する才能としてインゲニウムを捉えることができるだろう。そのことがより顕著に看取できるのが次の箇所である。

> アテナイ人の事績は、私が思う所では、確かに顕著で、優れたもので

あったけれども、伝え聞くところよりは、幾分見劣りするものであった。しかし、そこに偉大な才能 ingenia を備えた書き手たちが現れたので、アテナイ人の行状は世界中で偉大なものとして非常に有名になっている。したがって、事を成した人たちの力量 virtus は、せいぜい優れた才能 ingenia が叙述でそれを誉め上げることができた程度のものである。一方、ローマ国民には、それ（＝立派な才能を持つ書き手）は決して豊富ではなかった。なぜなら、非常に優れた者は皆、極めて多忙であり、身体 corpus 抜きで天性 ingenium を行使する evercebat<exercere 者はなく、最も優れた者は皆、叙述することよりも行動することを、自身が他人の（行動）を語るよりも、自分の立派に行動したことを他人から賞賛される方を好んでいたからである。[58)]

かつてのローマ人による歴史叙述が僅少であったことが述べられている箇所である。これの後半において、インゲニウムを行使／訓育することが述べられている。ローマ人は歴史叙述よりも政治を重視して、後者にインゲニウムを用いると同時に、用いることを通じてインゲニウムを発揮させていたのである。あたかも、選挙によって争われるローマの政治活動が、インゲニウムを競うこと自体を目的として行われていたかのようにさえ思えるような描写である。

さて、サッルスティウスが歴史叙述を行った前 40 年代後半の段階でも、ローマ人の手によるラテン語で書かれたローマ史は、ほとんど存在していなかった。[59)] 彼が歴史叙述を志したのは、カエサルの死後、それまで政治に向けてきたインゲニウムを有益に活かす適当な途が、他には無かったためである。

しかし、私の記憶では、桁外れな大きな精神力 virtus で、性格 mores を異にする 2 人の男たち、マルクス＝カトーとガイウス＝カエサルがいた。（叙述の）内容が彼ら（2 人）を提示したのだから、沈黙によって看過したり、（私の）天分 ingenium によって成し得る限り、両者の本性と性

格を明らかにしなかったりなどということは、（私の）意図ではなかった。[60)]

『カティリーナの陰謀』の山場であるカエサルと小カトーの演説を述べた後に、両者について、自らの「天分によって成し得る限り」述べるという意思表示がなされており、この著作の執筆動機の1つが図らずも看取される。このような文才としての用例が、文学研究において扱われてきたことについては前述したとおりである。[61)]

共和政期には、文才以外にも、インゲニウムが軍事的能力も含めた精神的能力の総体であったことは、本論で見てきたとおりである。ここで推測されるのが、ローマが共和政から帝政へと転じた結果、エリートが政治的インゲニウムを発揮する場がなくなったのではないかということである。その結果、インゲニウム概念が対象とする範囲が、政治的に問題のない文才に限定されるようになったのではないだろうか。[62)]

修辞・文学的な文脈で用いられたインゲニウムは、後に美学思想の中核的概念となるに至る。[63)] 18世紀イタリアの哲学者ヴィーコにおいては、「ばらばらに分離しているものを速やかに、適宜に、そして上首尾に1つに統合する治世の能力[64)]」といった全体性を構築する概念として扱われる。また、中世に獲得した「軍事に用いられる道具[65)]」という意味を介して、現在一般的に用いられるエンジンengineの語源となるに至る。[66)]

おわりに

本論では、これまで政治的概念としては看過されがちであったインゲニウムを考察した。まず、ウィルトゥス概念との深い関係性から同概念の重要性を確認した。続いて、それが「訓育されうる先天的能力」であるということに着目して、かつての階層流動性の低い「ノビレス支配」よりも、近年指摘される「競争的な政治文化」が存在していた共和政後期における政治状況

と適合的であることを確認した。さらに、インゲニウムを用いての人物描写から、インゲニウムの訓育可能性はキケロやサッルスティウスのような「新人」にとって自明であるだけではなく、演説や著作を通じて彼らの価値観が当時の社会に広く共有されていた蓋然性を指摘した。最後に、インゲニウムが活用することによって訓育される能力であることを確認し、共和政から帝政への政治体制の転換に伴う価値観の変容によって、共和政後期に顕著であったインゲニウムの政治的概念としての側面が元首政期の時代状況にそぐわぬものになったのではないかとの見通しを示した。

以上のようなインゲニウムからの視点が持っている意義は如何なるものであろうか。「競争的な政治文化」が受け入れられている現状においても、ウィルトゥスなどを通じて考察される当時の政治的価値観は、保守的な評価がなされている。[67] インゲニウムの考察を通じて、「ノビレス支配」に親和的な保守的なものとは異なる政治的価値観が、ローマ共和政後期に重要性を持っていたことが示せたならば、本論の目的は十分に達せられたと言えよう。

［注］

1） Gelzer (1912). 安井（2005）は、近年の動向を踏まえつつもノビレス支配の重要性を再確認している。

2） 共和政期のノビレス支配やクリエンテラを理解するためには、長谷川（1992）所収の第 4 章から第 8 章までの各論文が極めて有益である（編者の論考は、他の関連論考と併せて、長谷川（2001）の第Ⅱ部「クリエンテラ再考」に再収されている）。クリエンテラを軸とした共和政史研究の概観としては、同書の長谷川「序章　パトロネジ研究の現状と問題点」3-6 頁。

3） Hellegouarc'h (1963). この著作を「先行諸研究を綜合した記念碑的著作」と評価するのが、安井（2005）248 頁。長谷川（2001）532 頁、注 1 参照。

4） 共和政期の政治を「閥族派 optimates」「民衆派 populares」などの政治党派間の争いと見た党派理論 factio thesis は、Seager（1972）によって明確に否定されている。Cf. Millar (1984), p. 19. しかしながら、Robb（2010）のような本が刊行されていることに鑑みて、未だに旧来的な両派の対立構図に基づく研究が残存していると判断すべきかもしれない。E.g., Arena (2012). Cf. Roselaar (2013).

5） 同書の索引で引用箇所が 3 行以上にわたって列挙されている用語は以下の通り。amicitia, amicus, auctor, auctoritas, beneficium, bonus (boni), clemens;clementia, cliens;clientela, consilium, dignitas;dignus, eques;equites, factio, fides, gloria, gratia, gravitas, honos, imperium, laus, nobilis, nobilitas, novus (homo), officium, ops;opes, optimates, ordo senatorius, patres, patronus, popularis-populares, potentia, potestas, princeps;principes, sententia, virtus. cf. Index verborum latinorum in Hellegouarc'h (1963), pp. 585-592. 詳述は避けるが、いずれも重要視されてきた用語である。

6） この点については、砂田（1997）が詳述している。またミラーによるノビレス支配論批判として提起された「民主政論」については、他稿で何度か触れているので、そちらを参照されたい。鷲田（2000『西洋史学』）、鷲田（2000『西洋古典学研究』）年、鷲田（2010）。

7） Hopkins, Burton (1983), pp.107-116. 砂田（1997）68 頁参照。

8） Burckhardt (1990), p. 88. 砂田（1997）67 頁参照。

9） Badian (1990), pp. 409-413.

10） Sal., *Iug*. 63. 6.

11） 前代と比べて共和政後期においてはクリエンテラの束縛が弛緩したことが知られている。長谷川（1992）所収の前掲各論文参照。このことは、クリエンテラ以外の要素がノビレス支配が強化された要因となっていることを示しているように思われる。

12） Lintott (1990). 砂田（1992）参照。

13） 鷲田（2000『西洋史学』）。Cf. Yakobson (1999).

14） 砂田（1992）68 頁。Hopkins and Burton (1983), pp. 55-66, Broughton (1991).

15） *TLL*, s. v. ingenium.

16） Hellegouarc'h (1963), p. 298. cf. p. 588.

17） Cic., *Top*. 73. "Naturae auctoritas in virtute inest maxima; in tempore autem multa sunt quae afferrant auctoritatem: ingenium, opes, aetas, fortuna, ars, usus, neccesitas, concursio etiam non numquam rerum fortuitarum."

18） Hellegouarc'h (1963), p. 519, n. 1. cf. p. 588. この用例として挙げられている Liv. 2. 24. 3 での実際の記述は cui ingenium magis populare erat である。これは、第 1 回聖山事件直前の前 495 年度コンスルであった 2 人の内、頑迷なアッピウス・クラウディウス・サビヌスよりもプブリウス・セルウィリウス・プリスクスの方が民衆に対して穏健であった旨を述べているものである。

19） 枚挙に暇がないが、最近の研究として Müller (2001), Syson (2009) を挙げておく。

20） 吉村（1950）。当該研究の存在については、長谷川博隆氏にご教示を賜った。木村（1988）147-148 頁に同論文が要約されている。

21） 吉村氏は、サッルスティウスの思想を以下の 7 点にまとめている。「第一。イン

ゲニウムそのものは人間に naturalis なものとして普遍的である。即ち特殊な人、特殊な場合に限らず、凡ゆる時と所とに於いてそれに還るべき一般的なものである。第二。又それは各個人が眞の自己にかえる時にのみ到達し得るという意味で個人的な原理であるとも言わなければならない。凡ゆる執着を離れて冷静に己が naturalis sapientia を見凝めよ、と、これが彼の根本主張である。第三。この叡智（サピエンティア）は観想的なものならずして実践的なものである。この事は序文を一読すれば明瞭である。第四。natura の完成態は品性（mos, ars）と呼ばれる。それは或る人がインゲニウムに即して形成し、或る人がインゲニウムを離れて頽廃させた所の各人格である。第五。理想的な人物とはインゲニウムに即した品性を形成した者である。今仮にこれをインゲニウム人と呼ぶ事とする。第六。その反対を仮に非インゲニウム人と呼ぶならば、それは「邪なる慾情に捉われて怠惰と肉体の快樂に落ちこみ、インゲニウムを融し去る所の邪曲なる人々（Jug. 1,4）」である。即ち非インゲニウム人の条件は慾情、怠惰、暗愚等である。第七。理想的な行爲とはインゲニウムに即した立派な行爲である（Cat. 1, 3; Jug, 2, 2）。非理想的な行爲とはその反対である。」吉村（1950）42-43 頁。下線部による強調は、原文では傍点によるもの。

22） Sal., *Cat*. 1 訳文はサッルスティウス（2008）33-34 頁に依り、原文のラテン語単語を補っている。以後、他の史料の邦訳にも同様に補足している。

23） Sal., *Cat*. 2. 2. 訳文はサッルスティウス（2008）34-35 頁。Cf. Sal. *Iug*. 57.

24） Sal., *Iug*. 2. 訳文は拙訳。

25） Plaut. *Trin*. 367-368. 訳文はプラウトゥス「三文銭」（上村健二訳）『ローマ喜劇集 4』京都大学出版会、2002 年、420-421 頁に依る。

26） Cic., *Tusc*. 5. 24. 68. 訳文は「トゥスクルム荘対談集」（木村健二・岩谷智訳）『キケロー選集 12』岩波書店、2002 年、321 頁に依る。

27） 一例としてエルグアルクによるウィルトゥスの引用箇所を挙げておく。Cf., Hellegouarc'h (1963), p. 27, p. 32, p. 45, p. 46, p. 104, p. 178, p. 232, pp. 242-243, pp. 274-277, p. 286, p. 294, p. 298, p. 299, p. 305, p. 316, p. 319, p. 331, p. 338, p. 350, p. 353, p. 355, p. 367, p. 368, p. 371, p. 372, p. 376, p. 377, p. 386, p. 388, p. 398, p. 399, p. 403, p. 408, p. 410, p. 413, p. 444, p. 459, p. 461, pp. 476-483, p. 485, p. 486, p. 496, p. 568. cf. p. 592. また、安井萌「ウィルトゥス、フィデス、ノビリタス」安井（2005）227-251 頁所収も、この概念を扱っている。

28） 古典史料において ingenium と virtus とが同時に用いられている箇所の概数は、3 世紀以前の古典文献史料のテクストが収められている CD-ROM 版の *Bibliotheca Teubneriana Latina-1* によると、186 箇所（検索条件は、Formae 項目に「ingeni*+virtu*」と入力）。その内、12 箇所は ingeniosus や virtuosus 等の派生語。ingeni* 単独での検索結果数が派生語を含めて 2693 箇所、virtu* 単独が 4889 箇所

である。*BTL-1* (1999).

29） Sal., *Cat*. 1, Cic., *Tusc*. 5. 24. 68.

30） Cic., *Verr.* 2. 3. 7. 訳文は「ウェッレース弾劾Ⅱ　第三演説」（大西英文訳）『キケロー選集 5』岩波書店、2001 年、9 頁に依る。

31） Cic., *Fam*. 2. 3. 2.（前 53 年前半。前 50 年度護民官、C. ＝スクリボニウス＝クリオ宛書簡）訳文は「縁者・友人宛書簡集Ⅰ」（高橋宏幸・五之治昌比呂・大西英文訳）『キケロー選集 15』岩波書店、2002 年、124 頁に依る。

32） Cic., *Fam*. 10. 3. 2.（前 44 年 12 月 9 日直後。前 42 年度コンスル、L. ＝ムナティウス＝プランクス宛書簡）訳文は「縁者・友人宛書簡集Ⅱ」（大西英文・兼利琢也訳）『キケロー選集 16』岩波書店、2002 年、209-210 頁に依る。

33） Sal., *Cat*. 2. 1. 訳文はサッルスティウス（2008）34 頁に依る。

34） Sal., *Cat*. 6. 6. 訳文はサッルスティウス（2008）41 頁に依る。

35） Cf. Plaut. *Trin*. 367-368.

36） Cf. Cic., *Verr.* 2. 3. 7, Cic., *Fam*. 10. 3. 2, Sal., *Iug*. 63. 2-3.

37） 名詞化した exercitum を経て、英語の exercise の語源となる。

38） Cic., *Tusc*. 3. 1. 2.「トゥスクルム荘対談集」156 頁。

39） 詳しくは、鷲田睦朗「（序論）カティリーナとサッルスティウス――『カティリーナの陰謀』の 2 人の造り手たち――」サッルスティウス（2008）3-30 頁所収を参照。

40） Cic. *Sest*. 136. 訳文は「セスティウス弁護」（宮城徳也訳）『キケロー選集 1』岩波書店、2001 年、322 頁に依る。

41） Plin., *Nat. Hist*. 14. 4.

42） 注 21。吉村（1950）43 頁参照。

43） Sal., *Iug*. 63. 2-3. 訳文は拙訳。

44） 吉村（1950）43 頁。

45） Sal., *Cat*. 5. 1-4. 訳文はサッルスティウス（2008）38-39 頁に依る。

46） サッルスティウス（2008）13 頁、38 頁注 1。

47） Sal., *Iug*. 6. 1. 訳文は拙訳。

48） Sal., *Cat*. 25. 5. 訳文はサッルスティウス（2008）68-69 頁に依る。

49） Cic., *Brut*. 237. 訳文は拙訳。

50） 鷲田（2000『西洋史学』）57 頁。Cf. Cic., *Att.* 1. 1. 2, 1. 2. 1, Broughton (1991), pp. 11-12.

51） Cf. Broughton (1952), p. 97, Broughton (1960), p. 22, p. 64, Broughton (1986), pp. 209-210.

52） Q. Cic., *Com. Pet.* 1.

53） 鷲田（2000『西洋史学』）57 頁、59 頁注 21 参照。Cf. Yakobson (1992), p.47, Cic., *Leg. Man*. 1. 2, *Off*. 2. 59.

54） C. Coelius Caldus. Cf. Broughton (1952), p. 12, Broughton (1960), p. 16.
55） Q. Cic., *Com. Pet.* 11. 訳文は拙訳。
56） Q. Cic., *Com. Pet.* 28. 訳文は拙訳。
57） Sal. *Iug.* 4. 1-2. 訳文は拙訳。
58） Sal., *Cat.* 8. 2-5 訳文はサッルスティウス（2008）43-44 頁に依る。
59） サッルスティウスの歴史叙述に関する諸問題については、鷲田（2006）及び、鷲田「（序論）カティリーナとサッルスティウス」サッルスティウス（2008）3-30 頁所収を参照されたい。Cf., Sal., *Cat.* 1-4.
60） Sal., *Cat.* 53. 6. 訳文はサッルスティウス（2008）118 頁に依る。
61） 注 19 参照。
62） このようなインゲニウム概念の変質は、南川（1995）の第 1 部第 1 章の前提となっている「自由」libertas 概念の変質、それの「平和」pax、「安寧」securitas への同一化といった事態と軌を一にしているように思われる。Cf. Wirszubski (1950), pp. 167-171. 共和政後期における「自由」概念についての最新のものとしては、Arena（2012）が挙げられる。
63） Müller (2001).
64） ヴィーコ（1987）70-71 頁。松村（2003）54-55 頁参照。
65） D. du Cange, s. v. INGENIUM.
66） *Oxford English Dictionary*, 3rd ed., s. v. engine, n.
67） Hölkeskamp (2010), passim, esp. pp. 105-106.

［参考文献］

刊行史料（The Loeb Classical library の各巻は煩雑なので省略する）
『キケロー選集』岩波書店、1995-2002 年。
サッルスティウス『カティリーナの陰謀』合阪學・鷲田睦朗（翻訳・註解）、大阪大学出版会、2008 年。
『ローマ喜劇集』京都大学出版会、2000-2002 年。

［辞典類］

Bibliotheca Teubneriana Latina-1, CD-ROM, ver. 1.0.b, Stuttgart, 1999.
D. du Cange, *Glossarium mediae et infimae latinitatis*, 4. Band, Graz, 1954, pp. 360-361, s. v. INGENIUM.
Oxford English Dictionary, 3rd ed., 2010, s. v. engine, n.
Thesaurus Linguae Latinae, Leipzig, Stuttgart, 1900-, Vol. 7, Pars 1, Fasc. 10, cols. 1522-

1535, s. v. ingenium.

［欧語文献］

V. Arena, *Libertas and the Practice of Politics in the Late Roman Republic*, Cambridge, 2012.

E. Badian, The Consuls, 179-49BC, *Chiron* 20, 1990, pp. 371-413, pp. 409-413.

T. R. S. Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic*, New York, vol. 2 and 3, 1952, 1986.

Id., *Supplement to The Magistrates of the Roman Republic*, New York, 1960.

Id., *Candidates Defeated in Roman Elections: Some Ancient Roman "Also-Rans"*, *Transactions of the American Philosophical Society*, New Series 81-4, Philadelphia, 1991.

L. A. Burckhardt, The Political Elite of the Roman Republic: Comments on Recent Discussion of the Concepts nobilitas and homo novus, *Historia* 39, 1990, pp. 77-99.

M. Gelzer, *Die Nobilität der römischen Republik*, Leipzig, 1912.

J. Hellegouarc' h, *Le vocabulaire latin des relations et des partis politique sous la république*, Paris, 1963.

K.-J. Hölkeskamp, *Reconstructing the Roman Republic: An Ancient Political Culture and Modern Research*, Princeton, 2010, (translatation of id., *Rekonstruktionen einer Republik*, Munchen, 2004).

K. Hopkins, G. Burton, Political Succession in the Late Republic (249-50B.C.), in: K. Hopkins, *Death and Renewal*, (*Sociological Studies in Roman History*, vol. 2), Cambridge, 1983, pp.31-119.

A. W. Lintott, Electoral Bribery in the Roman Republic, *JRS* 80, 1990, pp. 1-16.

F. Millar, The Political Character of the Classical Roman Republic, 200-150 B.C., *JRS* 74, 1984, pp. 1-19.

C. Müller, Rhétorique de l'« ingenium » et personnalité littéraire, *Emerita* 69-2, 2001, pp. 318-346.

M. A. Robb, *Beyond Populares and Optimates: Political Language in the Late Republic*, *Historia Einzelschriften* 213, Stuttgart, 2010.

S. Roselaar, reviewing Valentina Arena, *Libertas and the Practice of Politics in the Late Roman Republic*, *The Ancient History Bulletin Online Reviews* 3, 2013, pp. 45-47.

R. Seager, Factio: Some Observations, *The Journal of Roman Studies*, *JRS* 62, 1972, pp. 53-58.

A. Syson, Born to speak: Ingenium and Natura in Tacitus's Dialogue on Orators, *Arethusa*, 42-1, 2009, pp. 45-75.

Ch. Wirszubski, *Libertas as a political idea at Rome during the late Republic and early principate*, Cambridge, 1950.

A. Yakobson, Petitio et Largitio: Popular Participation in the Centuriate Assembly of the Late Republic, *JRS* 82, 1992, pp. 32-52.

Id., *Elections and Electioneering in Rome: A Study in the Political System of the Late Republic*, *Historia Einzelschriften* 128, Stuttgart, 1999.

［日本語文献］

ヴィーコ『学問の方法』上村忠男・佐々木力訳、岩波文庫、1987 年。

木村英亮「ローマの広域支配についてのノート：吉村忠典教授業績と要約」『横浜国立大学人文紀要』第一類、哲学・社会科学 34 号、1988 年、145-166 頁。

砂田徹「選挙買収禁止法とローマ共和政末期の政治―A.W. リントットの近業にふれて―」『名古屋大学文学部研究論集史学』38 号、1992 年、23-40 頁。

砂田徹「共和政期ローマの社会・政治構造をめぐる最近の論争について――ミラーの問題提起（一九八四年）以降を中心に――」『史学雑誌』106-8、1997 年、63-86 頁。

長谷川博隆編『古典古代とパトロネジ』名古屋大学出版会、1992 年。

長谷川博隆『古代ローマの政治と社会』名古屋大学出版会、2001 年。

松村高夫「社会史の認識論的系譜――ヴィーコからミシュレへ、さらにフェーブルへ――」『三田学会雑誌』96-3 号、2003 年、41-69 頁。

南川高志『ローマ皇帝とその時代 元首政期ローマ帝国政治史の研究』創文社、1995 年。

安井萌『共和政ローマの寡頭政治体制――ノビリタス支配の研究――』ミネルヴァ書房、2005 年。

吉村忠典「サルルスティウス小論」『史学雑誌』59-6、1950 年、39-61 頁。

鷲田睦朗「ローマ共和政「最後の時期」における高位公職選挙――ケントゥリア民会の制度とその運用状況から――」『西洋史学』199 号、2000 年、44-60 頁。

鷲田睦朗「書評：F. G. B. Millar, *The Crowd in Rome in the Late Republic*. (Thomas Spencer Jerome Lectures 22), Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1998」『西洋古典学研究』48 号、2000 年、137-139 頁。

鷲田睦朗「偽り隠す者、サッルスティウス――『カティリーナの陰謀』の執筆理由――」『パブリック・ヒストリー』3 号、2006 年、77-87 頁。

鷲田睦朗「共和政期ローマにおける「民主政」という虚構――H. ムーリツェン「民衆／民会の権力」論文を通して――」『古代史年報』8 号、2010 年、1-7 頁。

（大学院博士後期課程単位取得退学／大阪国際大学非常勤講師）

SUMMARY

On *Ingenium*: Thinking "the Competitive Political Culture" in the Late Republican Rome

Mutsuro Washida

The purpose of this study is to show the significance of *ingenium* as the political idea. This Latin word means innate or natural quality, intellectual power. In recent decades, it has been proposed that the politicians had struggled in "the competitive political culture" in the late Republican Rome. Such a new historical image does not match to the classical theory on the political control by *nobiles*. The monumental study of Hellegouarc'h on the political ideas in the Roman Republic reinforced this theory. But little is argued on *ingenium* as the political idea. It has generally studied in the literal and rhetorical sphere.

At first, I argued that the importance of this idea from the point of affinity with another political idea, *virtus*, whose political significance is admittedly approved. Next, I show that politicians and historians in the late Republic like Sallust, Cicero naturally consider that innate *ingenium* can be exercised a posteriori. This point is very important. If only hereditary *nobiles* could hold political real power, the educability of this talent cannot be regarded as significant. At last, I examine the use of this idea on their portrayals of persons to show it fit the competitive political reality in those days.